

『大日経』所説の天文観

山 本 匠 一 郎（隆 信）

はじめに

占星術（astrology）の起源は、バビロニア・エジプト・ギリシャに遡り、古代のインド・中国に伝わってそれぞれ独自に進展した。紀元前6世紀頃の古代インドにはヴェーダの補助学（vedāṅga）として天文学（jyotir-vidyā⁽¹⁾）が独立した学問分野として成立したとされる。仏典においても天文学に関する記載は、多くの大乘経典に見られ⁽²⁾、特に密教経典⁽³⁾で詳細に論じられる傾向がある。近現代の学問である天文学（astronomy）は占星術とは大きく異なるとされるが、両者とも天体の規則的な運行を観測することを基礎としている。古代から人は暦をもとに生活し、天則に倣って自然世界と人間との関係性を架橋し、暦法を定めて農事や宗教行事の時季を計り、吉凶禍福を予見することを常としていた。それはレヴィ＝ストロースが提唱した「具体の科学」⁽⁴⁾というホーリスティックな知の体系であり、現代人にとっての科学以上の確固たる学問であり信仰であり生活通念であったように思われる。

インド社会で占星術は広く浸透しており、知識階級であるバラモン・仏僧、そして密教経典の制作者・阿闍梨たちにおいても学ぶべき教養として認知されていた。仏教内部でも太陽・月・星・宿曜に対する信仰と、暦学（暦法・暦術ともいう）に関わる天文知識は外教として退けられることなく、受容されてきた。真言密教では占星術を重視して、不空訳『宿曜経』において「密教占星術」⁽⁵⁾として大成し確立された。

先行研究（Kotyk [2017][2019]）によれば、占星術を説く多くの密教経典の中でも、『大日経』は「初歩的」⁽⁶⁾と位置づけられる。天体現象に関する知識の体系が歴史的な前提となっているのであれば、むしろ占星術の発展段階や年代性よりも、天体の運行、日・月・星宿の配置が、彼ら

『大日経』所説の天文観

知識人の実際上の宗教生活にいかなる影響を与えていたかという点に関心を向けるべきであろう。実践者・修行者たちの天体に対する態度と意識はどうであったのかという点にこそフォーカスすべきである。また天体に対する通念や心性が、仏教の教理と実践の体系に抵触せずに、どこまで、どのように受容されているかという点も重要である。そうした天文に対する暦学・占星術的な観念を「天文観」と位置づけて、ここでは主として『大日経』の藏漢の注釈を参照して論じてみたい。

初期密教経典における天文観

初期仏教では、『遺教経』⁽⁷⁾に「星宿を仰観すべからず」と説かれるように、比丘たるものは占星術・夢占い等の怪しげな行為をしてはならないことが原則であったと思われる。その原則は規則・制度としての戒律にも見ることができる⁽⁸⁾。しかし初期仏教から時代をくだるにつれて、多くの仏教徒は呪文や呪術等の扱いと同様に、インドの民俗・習俗の通念に従っていった。大乘経典の那連提耶舍訳『大方等大集経』⁽⁹⁾では、どの星宿において、何の神に対して、どのような供物を捧げることによって、如何なる利益があるかを説いている。さらに大乘から初期密教へと遷り、占星術はインドの習俗を積極的に摂取する形で説かれていった。初期密教における占星術的要素は、教理よりはむしろ儀礼・行法の側面でその天文知識が援用され、曼荼羅作成の日時選定の場面で取り上げられる。それは『大日経』の先駆的経典である『蘇悉地経』⁽¹⁰⁾、『蕤呬耶経』⁽¹¹⁾、『金剛手灌頂タントラ』⁽¹²⁾でもはっきりとした形で窺うことができる。『蘇悉地経』第33章「成就時儀軌品」では、真言行の悉地が得られるタイミングについて論じられている。暦学と占星術は、悉地を得るために必須の要件であり、息災・増益・降伏等の修法の目的に沿って適切な時期を選び時宜にかなった修行をすべきことが説かれる。『大日経』の所説も初期密教経典における天文観を踏襲しているので、まずそれを詳しく見ておきたい。

『大日経』所説の天文観

初期密教経典と同様に、『大日経』も曼荼羅を描く土地を選定する際に吉相を判断する規準として天文・占星術を説いている。その所説を以下にチベット訳『大日経』からの和訳で示しておく。

秘密者の主よ、そこで土地を享受すべきであり、石・土塊・瓦礫・砂利をなくし、髪・粃殻・炭・灰・棘・骨・切株・小枝を除き、蟻・虫・生き物をなくして、一切の過失を捨離した場所は、諸天にとって特に吉祥である。そこで太陰日（^{ティティ}ཅེན་ལྷུང་མ་ tithi, 日）と、^{ナクシャトラ}星宿（^{ナクシャトラ}ཁྱེ་མཁའ་ nakṣatra, 宿直）と、^{グラハ}惑星（^{グラハ}གཞལ་ graha, 諸執）と、^{カラナ}半日（^{カラナ}ཁྱེ་ལ་ karaṇa）⁽¹³⁾と、^{ムフルタ}時（^{ムフルタ}ཡུན་མཇུག་ muhūrta, 時分）の吉兆のしるしがある日に、吉相が現れた朝に、一切如來に敬礼して、地神を呼び出す二つの偈を宣べるべきである。⁽¹⁴⁾

—『大日経』で説かれる、ティティ・ナクシャトラ・グラハ・カラナ・ムフルタは、ヒンドゥー暦における天体・天文単位・時間単位であり、インド占星術プロパーでは主要な五つの診断項目として挙げられる。まずしかるべき土地で曼荼羅を描く準備をした後に、天体の諸項目を判断して吉日を選定し、さらに弟子が吉夢を得たならば、その朝に警發地神偈を唱えて曼荼羅の中に弟子を導入するのである。密教徒は天体の運行に関する知識をもち、その吉凶を正確に把握し考慮しながら灌頂儀礼を実践すべきことが要請されている。こうした儀礼の前提には、天と地と人間が相關しているという観念があることは言うまでもないであろう。

灌頂儀礼は、阿闍梨が弟子を金剛薩埵として大日如來の悟りの世界へと直入させるために行なわれる儀礼である。悟りの世界とは、仏・菩薩・神々たちの曼荼羅世界であり、時空を超えた共時的（synchronic）な世界である。一方、人間が生きる現実世界は、恒常性と周期性に基づいた通時的（diachronic）な世界である。それはまた過去・現在・未来という時間の経過の中で遷移する世界である。我々が日常的に経験する個別の時間は通時的な世界であって、天の規則的な運行もまた通時態に属す

『大日経』所説の天文観

る。共時態と通時態の両者を関連させる契機となるのが夢の共時性であるから、灌頂儀礼に際して吉夢を得た修行者は、通時的な時空から共時的な時空へ移行する準備ができたものと見なされるのであろう。現実世界の曼荼羅の壇上に勧請される地神とは、過去の一切の時間を保持した共時的な世界の象徴である。地神の勧請によって共時態と通時態がシンクロし、一つの聖なる世界が現出するのである。通時的な世界（世俗）の土地を浄化し、天文の吉祥を選ぶことは、聖なる共時的な世界（勝義）を現出させるための前提となる重要な予備作業であると考えられる。レヴィ=ストロースが共時態と通時態の両者の時間を、生・夢・死の三位一体の儀礼構造として把握するように⁽¹⁵⁾、曼荼羅作成儀礼と灌頂儀礼には、世俗の時空と勝義の時空をシンクロさせるための要件と手順が説かれていることがわかる。

『大日経広釈』所説の天文観

さて次に『大日経』の所説について、8世紀のインドの学匠ブツダグヒヤは『大日経広釈』でどのように解釈しているのかを見ていくことにしたい。5箇所にわたって天文観、およびインド占星術についての言及があるので、煩を厭わず順次見ていきたい。

(1) 『大日経広釈』「具縁品」①

「太陰日と日」ということから、「朝に吉相を観る」ということまでに（説かれること）は、曼荼羅を描く土地を分別する規準（*ṣṣ-pramāṇa*）である。まとめられた要件である「吉兆の太陰日と星」というのは、星だけを吉祥とすべきではなく、全ての日と太陰日の吉祥について言及することを加えるのである。「朝に吉相を観れば」というのは、吉相を観るのに上・中（・下）の三種があって、その美妙であるのと、空中と、地中から生じたものとである。そのうち、天の虚空から妙音等が生じること、それは最上である。「空中」とは、吉慶語とバラモンの詠唱等を聞くことで、それは中位である。「地中から生じたもの」は法螺貝等が地面に置かれているのを見ること

で、それは下位である。そのように最初に着手する際に、朝にそれらの相の中でいずれか一つが生じたならばよいのであり、地を摂受する等の諸作法を始めるべきである。「地神たちを警発する、この二つの偈を唱えるべきである」というのは、そのように朝に吉相があれば、どこでも曼荼羅を描くべきその土地で、地神に対して、「あなたの上に地の曼荼羅を描きます」と勧請するのであって、それはまた讃嘆の偈から始めるのである。⁽¹⁶⁾

—ここでブッダグヒヤは、曼荼羅を描く際に必要となる規準として天文の相を占うことを説いている。その占星の要件は、いわゆる個別の星・天体 (jyotis) を見るだけではなく、総合的に天体の配置 (トランジット) を判断し吉祥の日程を選ぶことが求められる。入壇に際して吉日を選ぶことにより、その者の夢に好相が現れることが期待される。入壇の朝に夢の中で吉相が出た場合には、上・中・下の三種類の位相があつて、虚空からの妙音・バラモンの詠唱・法螺貝などが現出することが好相であるとされる。

重要な行事に際して吉日を選ぶということは、古今東西、世間一般に行なわれていたことであろうが、そうした世俗の事柄を仏教の勝義の立場ではどのようにとらえるべきか。次の用例でそれを見てみよう。

(2) 『大日経広釈』「具縁品」②

「そのとき金剛手は世尊の両足を頂礼して、世尊に次のように申し上げた」というのは、時と境と所作を、また善と不善の諸々の相を損なう者たちが、果を得るこの法を知らないためである。彼らを利益するために人々の間に、まず日と太陰日と星等の諸相をお説きになったのは、(それらが) 諸真言の自性である (からである)。勝義では菩提心であつて、それらの相を越えている。世俗ではまた曼荼羅と悉地と真言行の諸支分は有相であるけれども、利益の所作をなすものであり、星と太陰日等のこれらの諸相は、勝義と矛盾する。世俗における利益の所作がないのならば、何ゆえに世尊はそれらの相をお説きになったのかと尋ねることと、世尊はまた勝義の相をそ

のようであるとされたけれども、未来の諸衆生はその勝義の理趣を知らないのであって、それらの衆生を導くために、諸相を説く道理を示したのであって、それらの衆生はまた二種である。有に執着する者と、無に執着する者である。有に執着する者たちにまた太陰日と時と境等の事物に随順して説いて導くのであり、また無に執着する者たちにもそこから退転して有の門の中に導くためである。⁽¹⁷⁾

—ブツダグヒヤにおいて占星術的な諸観念は世俗の有相の行として位置づけられる。仏教の勝義の立場は無相を標榜するものであり、太陰日・星等の運行を見たり、吉凶を占相したりすることは有相であるから、勝義の立場とは相入れず矛盾する。しかし、そうした有相の立場に執着する外教徒たちを将来的に仏教へと導くために、またさらに無に執着する者たち（いわゆる声聞・独覚の二乗）を妙有の門へと導くために、あえて世尊大日如来は有相の行を示したのであるとする。こうした観念は「具縁品」のみならず「住心品」でも見られる。以下のようなのである。

(3) 『大日経広釈』「住心品」

「その因とは布施を与えることであって、相と適合することによって」というのは、斎戒を行ずることを修習する因によって、好い月と星と日等の日中において、父母等の親族たちに布施を与えることは、戒を護る善業を生じる芽と見るべきである。⁽¹⁸⁾

—引用文は、「住心品」中の「八心段」と呼ばれる世間八箇の住心の解説である。在家生活の中で斎戒を守り、規律ある宗教的な生活を営み、天文を見て吉日を選び、親族に布施供養を営むという行為は世間一般に行なわれていた。暦を読むための天文・占星術的な知識もまた世間智の範疇に属するものであることがわかる。こうした見解は次の引例も同様である。

(4) 『大日経広釈』「悉地出現品」

「光ある者の光」というのは、日・月・星等の光ある者たちである。それらの光ある者の中で、火は光ある者の最勝である。ラ (ra) 字は火の種子であるから、光ある者の最勝といわれる。世俗の自性を

示したものである。⁽¹⁹⁾

——ここでブッダグヒヤが論じているのは、火の種子ラ字の解釈である。日・月・星等の光の中でも火は最勝である。それは世俗の自性であると規定されている。天体は地・水・火・風の物質（元素 mahābhūta）中、火の元素（tejo-dhātu）に属するものであり、仏教の存在のカテゴリ―論においては有為法中の色法（rūpa）に属する。勝義・無為の立場に則るならば、有為には制約されることがないから、天体が及ぼす吉凶の働きからは自由であることになろう。なぜならそれらは単なる物質的な要素にすぎないからである。すなわち世俗・有為の存在は、勝義無自性の仏教の立場とは根本的に異なっており、勝義の理趣を知る真言行者は有為の不浄性から超越している。その端的な用例を最後に示しておこう。

(5) 『大日経広釈』『秘密曼荼羅品』

あたかも虚空が一切の有為の行境によって染まることがないように、同様に真言行者もまたあらゆる分別の行境によって（染まることがない）。その悉地を得た者はまた惑星と星と凶兆（ཁྲ་ལོ་ལྷ་ཁྲ་ durnimitta）等によって妨げられないと説かれる。あたかも虚空が有為等の垢によって染まることがないように、その密呪（ཐུག་པའི་ཐུགས་ siddhamantra）もまた惑星と星等の吉凶の働きに左右されず、彼ら（真言行者）は凶兆等によってはまた妨げられないということである。⁽²⁰⁾

——無為の虚空が有為の垢に染まらないように、真言行者は天体の運行や、天体がもたらす凶兆・災厄には左右されず、妨げられることがないとされる。免災の理由は、すでに勝義の立場を体得した成就者、および効果的なマントラの呪力は、有相・世俗の立場から超越しているからである。

以上の5例に依拠してブッダグヒヤの天文観をまとめれば次の4点になろう。

- ・ 曼荼羅に入るに際しては、天文を総合的に判断すべきであること
- ・ 天文事象は有相・世俗智・有為法に属すること
- ・ 天文の占相は仏教の勝義の立場に反するが、世間の人々を導くため、

『大日經』所説の天文観

また無に執着する声聞・独覚などの二乗を妙有の立場に導くために仏典でも説かれる⁽²¹⁾

・真言行者は天文の吉凶によっては妨げられず自由であること

『大日經疏』所説の天文観

次に『大日經疏』における天文観を見ていきたい。ブツダグヒヤにおいては天文の知識については世俗的に自明なものとされたものであろうか、具体的な内容には言及されない。しかし一行は、唐の玄宗の命を受けて大衍暦を作った傑出した天文学者であるから、その所説は極めて詳細にわたっており興味深い。一行の天文分野における業績については、すでに藪内清、加地哲定、大橋由紀夫らの優れた研究がある⁽²²⁾。先行研究によれば、唐代の中国暦学は、伝統的な中国暦に加えてインド占星術も導入し、インド由来の九執暦も採り入れて、国家の天文・気象機関である太史局には迦葉・俱摩羅・瞿曇の三家の天竺暦の専門家が任官された。一行はそうしたインド・中国両者の優れた知的環境の下で暦法を研究している。

さて以下に示す引用は少し長くなるが、先と同様に『大日經』「具縁品」の入壇に際しての場面である。

『大日經疏』「具縁品」

經に云く、「良日晨に遇いて、日を定め、時分・宿直・諸執、皆悉く相應し、食前ちなの時に於て、吉祥の相に値あう」とは、擇地ちやくじの事に因みて、便ち擇時ちやくじの支分を明すなり。凡そ爲す所の法事は皆須らく時義と契合すべし。今將に此の地を擇治せんとす。故に吉日に於て、地神じじんを警發きやうはつす。餘の法事は例して知るべきのみ。「良日晨」とは、謂く作法せんには、當に白分の月を用うべし。中に就きて一日・三日・五日・七日・十三日を皆吉祥とす。漫荼羅を作すに堪えたり。又月の八日・十四日・十五日は最勝なり。此の日に至りて常に念誦すれば、亦功を加うべし。「日を定む」とは、西方の暦法にて小の月を通計して、何れの日か當るべし。若し小の月が白分の内

に在らば、其の月の十五日は即ち黒分に屬す。用うるに堪えず。又曆法に日月の平行の度を通計するに、平朔^{へいこう}を作さば皆一小一大なるべし。日月平行の中に於ても又更に遲疾^{ちしつ}有るに縁りて、或る時は平行を過ぎ、或る時は平行に及ばず。所以に定朔^{ていさく}なれば或は進退一日、望^{ぼう}を定むること或は十四日に在り、或は十六日に在り。大抵は月の望は正しく圓滿の時を名けて白分の十五日とす。月の正半にして弦の如くなる時を亦八日とす。但し此を以て之を准約して、即ち日を定むることを得るなり。「時分」とは、西方の曆法は、晝夜に各の三十の時有り。一一の時に別に名號有り。晝日の如きは即ち影の長短を量りて之を計る。某の時に事を作せば則ち吉なり、某の時は則ち凶なり、某の時は中平なりと、各各に皆像類有り。「宿直」と言うは、謂く二十七宿なり。周天を分ちて十二房と作す。猶お此の間の十二次の如し。次毎に九足有り。周天に凡そ一百八足あり。宿毎に均しく四足を得たり。即ち是れ月の一日を行く程なり。二十七日を経て、即ち月一周天を行くなり。曆に依りて之を算^{かぞ}うれば、月の所在の宿は、即ち是れ此の宿直の日なり。宿に上・中・下有りて、性の剛柔・躁靜、同じからず。所作の法事も亦宜しく相順すべし。「諸執」とは、執に九種有り。即ち是れ日・月・火・水・木・金・土の七曜と及び羅睺^{らごう}・計都^{けいと}とを合して九執^{くしゅう}とす。羅睺は是れ交會の食神なり。計都は正翻には旗とす。旗星は謂く彗星なり。此の二執を除きて外に、其餘の七曜は相次ぎて日に直る。其の性類にも亦善惡有り。梵曆の中に説けるが如し。「食前の時」とは、晝夜に各の三時有り。食前には息災を作すべし、暮間には増益を作すべし、夜は降伏の事を作すべし。入漫荼羅灌頂は息災と相應す。故に食前と云う。⁽²³⁾

—ここで述べられていることは、中国曆学・インド占星術の天文知識であり、唐代一級の天文学者たる一行の面目躍如ともいうべき箇所である。一行の大衍曆は、「大衍」(『易経』「繫辞上傳」)という易学の神秘的な数觀念を導入しつつ、それをインド天文学・占星術の知見を参照し

て、中国暦学の数理と結びつけたものである。一行が「西方の暦法」「梵曆」⁽²⁴⁾の所説に知悉していることは随所に見出される。たとえば白分(śukla-pakṣa)・黒分(kṛṣṇa-pakṣa)の設定法、1,3,5,7,13日等を吉祥日と定めること(『蘇悉地経』と同様)、インドの暦時単位ムフルタ(muhūrta)の知識(各々の時間に吉凶があること)⁽²⁵⁾、九執(nava-graha)に関する知識といった点、これらはインド天文学・占星術由来の知識である。「平行」「遅疾」⁽²⁶⁾という表現は中国暦学の用語であって、すでに後漢時代に月の運行に遅速があること(月行遅疾)が発見され、6世紀には太陽の運行にも遅速と盈縮があること(日行盈縮)がわかっていた。その観測精度を高めて実際の暦に反映し、遅速の運動を求める補間法を確立させたのが大衍暦である。「大小の月」⁽²⁷⁾、「平朔」⁽²⁸⁾・「定朔」⁽²⁹⁾も天文用語であり、ひと月の日数が30日あるのを大の月といい、29日あるのを小の月という。平均値で月の満ち欠けを決める方法を平朔といい、実際の満ち欠けで決める方法を定朔という。『大日経疏』の所説では、小の月の場合、15日は黒分に相当するから修法に採用すべきではないとする。実際に見える月の姿を重視したものであろう。定朔であれば満月(望)は大抵15日に相当する。中国の暦法では唐初の戊寅暦以降、定朔を採用したが、大の月が4回続いたために平朔に戻されるなどの不整合が見られた。大衍暦以降は定朔が定着することになった。「二十七宿」・「十二房」⁽³⁰⁾・「十二次」⁽³¹⁾、日月食の交点(「羅睺は是れ交會の食神」⁽³²⁾)、これらの天文用語と知識によってほぼ全ての天体の動きは把握される。一行の天文知識の片鱗は『大日経疏』所説の天文観の中に散りばめられて輝きを放っていることを知ることができる。

紙幅の都合で割愛するが、暦学と占星術を結ぶ間には、天体の配置を心理的なコンステレーションとして解釈する、密教特有の天文観が『大日経疏』では語られている。たとえば太陽を本尊・行者と見なし、心を月と見なして、あたかも天体を観測するように修行の遅速・盈縮を観察すること、ムフルタの吉凶に際してそれぞれの時刻に適合した息災・増益・降伏の修法を選択することなどが説かれる。月の観念については

不空『菩提心論』⁽³³⁾にも見出すことができ、密教修行者は天体の運行に合わせて自らの心身を調律し修法を実践していたのであろう。

まとめ

『大日経疏』所説の天文知識の源泉が、善無畏阿闍梨のインド占星術の知見に由来するものなのか、または唐朝の国立天文台である太史局で得た暦学の知識情報に基づくものなのか、どちらであるのかは不明である。中国暦学由来の天文用語が随所で説かれることを見たが、これほどに詳しい天文知見は、それ以前の仏典内に確認することができない。

インドの諸宗教と同様に、インド・中国・日本の真言密教は、これらの天文知識を学習すべき世俗智として重視していたことが知られる。日本の真言密教の諸学匠たちも天文に関心を抱きつづけた。『大日経疏』の当該箇所为天文学的意味をより深く理解しようと、日本真言の『大日経』の注釈者たちは大いに努力を払っている。その関心の度合いは『大日経』解釈の歴史においてもかなり特異であって、種々の經典に加えて、仏教外の多くの論書が援用されている。『大日経疏演奥鈔』は、「具縁品」の本箇所を注釈するに際して『蘇悉地経』、『宿曜経』、『蘇婆呼経』、『瞿醯経』といった関連する經典を援用するだけでなく、陰陽書（『五行大義』）⁽³⁴⁾、曆書（『漢書律曆志』）⁽³⁵⁾、天文地理書（『天地瑞祥志』）⁽³⁶⁾等の文献を渉獵する博覧強記ぶりを示し、その天文学的な意義を正確に理解しようとしている。『大日経疏演奥鈔』は鎌倉期の東寺三宝（頼宝・杲宝・賢宝）の『大日経』教学の集大成であるが、その引用文献の中にはすでに失われた佚存書もあって、引用文例自体が非常に貴重であるが、それはまたいずれ稿を改めて論じたい。

『大日経』における天文に関する言及は少ないが、曼荼羅行の重要な場面で天文観を窺うことができる。『大日経』の曼荼羅行は、共時的な勝義の真理世界を現出させる儀礼であるが、日・月・星宿の吉祥面に関心を払い、天の通時的な運行を判断することが前提作業となっている。ブッダグヒヤに依拠すれば、密教徒にとって天体は、単なる色法であり

『大日経』所説の天文観

物質であり世俗の有為法の領域にすぎないが、天文現象に対して正しい関心と知識をもつことは外教であるヒンドゥー教徒を無相・勝義に勧誘し、さらには声聞・独覚を有相・世俗の利益に向かわせるために推奨されている。『大日経疏』ではインド・中国の天文・暦学の知識が開陳されており、一行の並々ならぬ見識を窺うことができる。天文知識は、仏教の教理と実践の体系に抵触することなく、世俗智として受容され、天体と修法の観念は密接に関連していた。しかし一方で密教徒は天文へ深い関心を抱きつつも、そこに耽溺・埋没したり振り回されたりすることなく、天文の吉凶の影響からは超越している。超越できる理由は、彼らがどこまでも勝義の真実世界に住しているからである。なお他の密教經典では、降伏法においてはあえて時日を選ばなかったり、清浄に身を保つ限りにおいて天文に関心を払わなかったりする、仏教の本来的な生き方もあったようであるから⁽³⁷⁾、世法から自由に超越しながらその利便性があるときには用いるというスタンスを採用している。ここに密教の実用主義があると言えるであろう。

資料

- 『大日経』 大正No848. Toh494/Ota126
『大日経疏』 大正No1796.
『大日経広釈』 (*Bhāṣya*) Toh2663/Ota3487
『大日経広釈』 (*Vṛtti*) Toh2663/Ota3490
『蘇悉地羯羅經』 大正No893. Toh807/Ota431
『蕤晒耶經』 大正No897. Toh806/Ota429
『金剛手灌頂タントラ』 Toh496/Ota130

参考資料

- Kotyk Jeffrey[2017] Buddhist astrology and astral magic in the Tang Dynasty
Kotyk Jeffrey[2019]「漢字圏の文学における西方占星術の要素：東西文化交流における仏教の役割」『駒澤大學仏教文學研究』19
大橋由紀夫[1995]「大衍暦の補間法について」『科学史研究』第Ⅱ期第34巻 (No.195)

- 大橋由紀夫[1998]「インドの伝統天文学—特に観測天文学史について（Ⅰ）・（Ⅱ）」『天文月報』91-8, 9
- 大橋由紀夫[1999]「中国における日月食予測法の成立過程」『一橋論叢』122-2
- 加地哲定[1956]「大衍暦考・続・続々」『密教文化』33-35
- 曲安京（大橋由紀夫訳）[1997]「一行の正接関数表（724AD）」『数学史研究』153
- 金本拓士・伊藤堯貫[1998]『『蕤晒耶經』蔵・漢訳テキスト研究(1)』『智山学報』47
- 名和敏光[2019]『東アジア思想・文化の基層構造：術数と『天地瑞祥志』』汲古書院
- 矢野道雄[2013]『増補改訂密教占星一宿曜道とインド占星術』東洋書院
- 藪内清[2017]『藪内清著作集』第1巻「中国の天文暦法」（初出1969）
- 藪内清[2018]『藪内清著作集』第3巻「唐僧一行について」（初出1987）
- 善波周[1952]『『摩登伽經の天文暦数について』』『東洋学論叢』27
- 善波周[1960]「インド古暦と佛教天文暦」『中野教授古稀記念論文集』中野教授古稀記念論文集編纂委員会
- 善波周[1968]「宿曜經の研究」『佛教大學大學院研究紀要』1

註

- (1) jyotir-vidyā, Mvyut.5059.
- (2) 『大聖文殊師利菩薩仏利功德莊嚴經』（大正No.319）、『大般涅槃經』（大正No.374）、『大方等大集經』「日藏分中星宿品第八・月藏分第十二星宿攝受品第十八」（大正No.397）、『宝星陀羅尼經』（大正No.402）、『仏説仏名經』（大正No.441）、『修行道地經』（大正No.606）、『正法念處經』（大正No.721）等、枚挙に遑がない。大橋由紀夫[1998:421]によれば、『大方等大集經・日藏分』ではヴェーダーンガ天文学の知識が黄道十二宮と共に示されている。
- (3) 密教經典では『宿曜經』（大正No.1299）、『摩登伽經』（大正No.1300）が詳細に論じ、大正No.1312までに占星術を主題とする密教經典が収載される。
- (4) 文化人類学者レヴィ=ストロースは『野生の思考』という著作で、世界を全体的に、かつ詳細に観察し分析する古代人の思考法の卓越性を論じ、それを「具体の科学」と名づけて第1章の章名にしている。
- (5) 密教占星術…善波周、矢野道雄、森田龍僊、岩原諦信の諸研究を参照されたい。
- (6) Kotyk[2019:104]「『大日經疏』は「良日」、すなわち月の何日に曼荼羅を作るべきかを説明しているが、非常に初歩的である。当時、インド占星術と密教に精通している仏教徒は、更に詳細な説明が望ましいと考えたであろう。この問題を解決して密教占星術を詳しく述べたのは、不空（705-774）であった。」
- (7) 『遺教經』…『仏垂般涅槃略説教誡經』（大正12, 1110c²⁶⁻²⁷）「仰觀星宿推步盈虛曆數算計。皆所不應」。その他の例として、同様な趣旨を説く經典を挙げる。『仏

『大日經』所説の天文觀

開解梵志阿毘經』(大正1, 261c⁸)「沙門不得仰觀曆數。推步日月。盈虛薄蝕。星殞變見。」『仏所行讚』(大正4, 48a⁸⁻⁹)「仰觀於曆數 步推吉凶象 占相於利害此悉不應爲。」『大愛道比丘尼經』(大正24, 947c²⁰⁻²⁴)「八者沙彌尼盡形壽不得學習巫師不得作醫蠱飲人不得說道日好日不好。占視吉凶仰觀歷數。推布盈虛日月薄蝕。星宿變殞山崩地動。風雨水旱占歲寒熱。有多病疾一不得知」

- (8) 戒律上の占星術・夢占い等の禁止例。『四分律』(大正22, 817b²¹)「若當起出戶外瞻視四方仰觀星宿。若至經行處守攝諸根令心不散。爾時世尊。在閑靜處思惟。作是念言。我與諸比丘結戒。說波羅提木叉。中有信心新受戒比丘。未得開戒。不知當云何學戒。我今寧可聽諸比丘集在一處說波羅提木叉戒。『沙彌十戒法并威儀』(大正24, 927a⁶⁻⁸)「沙彌之戒。盡形壽。不得學習奇技巫醫蠱道。時日卜筮占相吉凶。仰觀曆數推步盈虛。日月薄蝕星宿變怪」。
- (9) 『大方等大集經』大正13, 274a⁷-275c²³
- (10) 『蘇悉地經』「分別悉地時分品第三十三」大正18, 625b²⁸-626a⁴
- (11) 『菴呬耶經』「揀擇地相品第三」大正18, 760c²⁹-762b⁹。金本拓士・伊藤堯貴[1998:43-66]参照。
- (12) 『金剛手灌頂タントラ』「曼荼羅建立儀軌」D31b⁷-32a¹/P32b⁴⁻⁵
- (13) 半日(カラナ)はティティを前半と後半に二等分した時間單位。
- (14) 『大日經』「具緣品」D161a⁵-161b¹/P125b²⁻⁴。大正18, 4c²⁻⁶「祕密主彼揀擇地。除去礫石碎瓦破器。鬻髻毛髮糠糟灰炭。刺骨朽木等。及蟲蟻蛻蜋毒螫之類。離如是諸過。遇良日晨定日。時分宿直諸執。皆悉相應。於食前時值吉祥相。先當爲一切如來作禮。以如是偈警發地神」
- (15) クロード・レヴィ=ストロース『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房、1976, p.285. 共時・通時関係は、儀礼を通じてクロスリンクしあい、架橋されて渾然として一体になる。この架構機能は、ベルグソンにおいては人間独自の根源的能力として重視された。
- (16) 『大日經広釈』(Bhāṣya)「具緣品」D107b⁵-a³/P131b⁴-132a³
- (17) 『大日經広釈』(Bhāṣya)「具緣品」D108b¹⁻⁶/P132b⁴-133a³
- (18) 『大日經広釈』(Bhāṣya)「住心品」D83a⁶⁻⁷/P100b²⁻⁴
- (19) 『大日經広釈』(Bhāṣya)「悉地出現品」D172a⁴⁻⁵/P216a²⁻⁴
- (20) 『大日經広釈』(Bhāṣya)「祕密曼荼羅品」D206b²⁻⁶/P259a²⁻⁵
- (21) なお有相無相、対論者、機根論の諸問題に関しては、すでに過去の拙論で論じたことがある。
- (22) 大衍暦の正接関数表を術文に基づいて再構成した曲安京は、小数点以下4桁の数値を算出して次のように驚きを表明している。「先人はかつて『大衍暦』の術文に誤りがあるのではないかと疑っていたが、上述の復元から明らかのように、

『大衍暦』の原文にはなんと一文字の誤りもないのである！」(曲安京(大橋由紀夫訳)[1997:21])。

- (23) 『大日経疏』大正39, 617c¹⁸-618a²⁰
- (24) 西方の暦法・梵暦…西方とは中国以西の中央アジア、西アジア、時にはインドを含めていうが、明確にインドの暦法をさす場合は梵暦という。古代中国(前漢の武帝)以来、暦学を基に中国皇帝が定めた伝統的な暦法とは異なる暦という意味である。
- (25) ムフルタ (muhūrta) は朝6時を始点として1日を30分割する(1ムフルタ=48分)。30の呼称は諸説ある(金本拓士・伊藤堯貫[1998:69-70])。一般に以下の神名を用いる。① Rudra, ② Āhi, ③ Mitra, ④ Pitṛ, ⑤ Vasu, ⑥ Vārāha, ⑦ Viśvadevā, ⑧ Vidhi, ⑨ Sutamukhī, ⑩ Puruhūta, ⑪ Vāhinī, ⑫ Naktanakarā, ⑬ Varuṇa, ⑭ Aryaman, ⑮ Bhaga, ⑯ Girīśa, ⑰ Ajapāda, ⑱ Ahir-Budhnya, ⑲ Puṣya, ⑳ Āśvinī, ㉑ Yama, ㉒ Agni, ㉓ Vidhātṛ, ㉔ Kaṇḍa, ㉕ Aditi, ㉖ Jīva (Amṛta), ㉗ Viṣṇu, ㉘ Dyumadgadyuti, ㉙ Brahma, ㉚ Samudra。
- (26) 遅疾…日月の軌道は楕円運動なので動きが遅くなったり速くなったりする。月の場合を月行遅疾、太陽の場合を日行盈縮といい、西洋では紀元前2世紀、中国では6世紀に発見された。
- (27) 大小の月…小の月は2月4月6月9月11月で「西²⁴向⁶く⁹土¹¹」と覚える。月の周期(朔望月)は約29.5日(正確には29.530589日)で、少しずつずれていく。
- (28) 平朔…太陰太陽暦における月の始めの日(朔日)を決めるための計算方法。恒朔ともいう。新月が1日となるように大の月・小の月を配当するが、晦日(月の最後の日、29日か30日)や2日にずれることもある。
- (29) 定朔…月の満ち欠けを平均値でなく実際の月の満ち欠けを用いて決める方法。定朔を導入すると、大の月や小の月が連続して現れる。元嘉暦を作った何承天が提唱し、隋の劉焯による皇極暦では日行盈縮も採り入れられ、唐の戊寅暦において定朔が導入された。大の月が4回続く四大を避けるために平朔に戻すか、または夕方以降に朔となる場合は朔を翌日にする進朔を行なって調整をする。
- (30) 十二房… ① *Meṣa*, 0°, *Vaiśākha*, おひつじ座, 羊宮(婁胃昂) ② *Vṛṣa*, 30°, *Jyāiṣṭha*, おうし座, 牛宮(昂畢觜) ③ *Mithuna*, 60°, *Āśāḍha*, ふたご座, 姤宮(觜參井) ④ *Karkaṭa*, 90°, *Śrāvaṇa*, かにかし座, 蟹宮(井鬼柳) ⑤ *Simha*, 120°, *Bhādrapada*, しし座, 獅子宮(星張翼) ⑥ *Kanyā*, 150°, *Āśvina*, おとめ座, 女宮(翼軫角) ⑦ *Tulā*, 180°, *Kārtika*, てんびん座, 秤宮(角亢氏) ⑧ *Vṛścika*, 210°, *Mārgaśīrṣa*, さそり座, 蝎宮(氏房心) ⑨ *Dhanus*, 240°, *Pauṣa*, いて座, 弓宮(尾箕斗) ⑩ *Makara*, 270°, *Māgha*, やぎ座, 摩竭宮(斗女虚) ⑪ *Kumbha*, 300°, *Phālguna*, みずがめ座, 餅宮(虚危室) ⑫ *Mīna*, 330°, *Caitra*, うお座, 魚宮(室壁)

『大日経』所説の天文観

- 奎)。括弧は二十七宿の方位を表す。
- (31) 十二次…中国暦学における天体の位置を表わす基準。惑星、とくに歳星＝木星の位置を表わすのに用いられ、歳在星紀、歳在大火のように記述。星紀（丑）玄枵（子）姫訾（亥）降婁（戌）大梁（酉）実沈（申）鶉首（未）鶉火（午）鶉尾（巳）寿星（辰）大火（卯）析木（寅）。括弧は干支の方角を表す。
- (32) 日食・月食は黄道（太陽の軌道）と白道（月の軌道）の交点付近で朔望となるときに生じる。その周期性はすでに前漢の時代に経験的に知られ、後漢末にはその予測法が確立された（大橋由紀夫[1999]）。
- (33) 『菩提心論』大正32, 574a¹⁵⁻²²では月の十六分を行者の心中の行相と観ずることが説かれる。
- (34) 『五行大義』…隋の蕭吉によって撰述された、五行に関する古今の説の集大成。全5巻。中国では早く滅び、日本にのみ残った佚存書。
- (35) 『漢書律曆志』…漢書、唐書には曆志という章があり、詳細な暦法と算術法が記されている。また『大日経疏演奥鈔』大正59, 50c⁸、『大日経疏私記』巻24（27丁右～）では『淮南子』を援用する。
- (36) 『天地瑞祥志』…新羅の天文地理書。全20巻中、1, 7, 12, 14, 16, 17, 18, 19, 20の各巻のみが残存する。日本にのみ残った佚存書。名和敏光[2019]参照。『大日経疏演奥鈔』大正59, 58a²では失われた第9巻を引用する。
- (37) 『不空罽索神変真言経』（出世相应解脱品第二十九中「日も同様に星も昼夜も同様に気に懸けることなく、ただ念誦や施食、同様に清浄・潔白なる沐浴、さらに浄衣を保ち、真実を語り、慈しみの心、さらに師に従順である、そのように保つ人は、清浄な飲食を混ぜて食べることを避けるのである。」梵文写本89b⁴⁻⁵,
na tithim naiva nakṣatram ahorātram naiva vidhīyate / kevalam jāpabaliṃ vaiva
śuciśaucasusnātaṃ ca śucivastram dhāraṇam satyavādī maitracittaś ca guruśuśrūṣā
sādhāraka śucibhojanapānaṃ ca saṃkarabhojya vivarjanam /

キーワード：『大日経』 占星術 暦学 天文観